

タイトル	児童期・思春期に不登校を起こした青年の被養育体験と自立の課題
サブタイトル	
キーワード	精神，児童期・思春期，不登校，被養育体験，自立
研究者名	下條こなみ ¹⁾
共同研究者	種浦佐智子 ²⁾ ，花田裕子 ³⁾ ，永江誠治 ³⁾
所属施設名	1) 国立病院機構九州がんセンター 2) 国立病院機構福岡東医療センター 3) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
図表の添付枚数	図 0点 / 表 0点

I. はじめに

子どもを取り巻くメンタルヘルスの問題はメディアで取り上げられることも多く社会的関心を集めている。子どもの虐待通告件数は増加の一途であり、様々な予防・早期介入は行われているが、虐待行為そのものがなくなっても不安や、不眠、怒りっぽさといった症状（心的外傷後ストレス症候群：PTSD）を呈して、学童期になって学校生活や集団生活に不適応を起こしやすい¹⁾。また、子どものうつや社会不安障害も関心を集めている。うつ状態や不安状態の子どもは、睡眠障害や集団に対する不安、意欲の低下、イライラ感があり PTSD と同様に集団不適応を起こしやすい。成長発達段階において児童期・思春期では、重要他者として友人の存在が大きくなる年齢である。集団に不適応を起こしている子どもたちは、友人を求めながらも、適応できずに自信を喪失して自尊心が低くなる。このような子どものメンタルヘルスの問題が広く認識されるようになってきたことから、子どもを対象とした精神医療の需要は高まり、児童精神科の入院施設や外来施設が全国で増えている。子ども達が児童精神科を受診するきっかけは様々であるが、目良らは 1991-2000 年の児童思春期外来の統計をまとめたものから、不登校を理由に受診してくる子どもは思春期外来の新患総数の 8.4%～42%と高い割合を占めていたことを明らかにしている²⁾。不登校になる直接の原因は友人関係や学業に関連した学校生活など様々あるが、その背景には先に述べたようなメンタルヘルスの問題や家庭内におけるトラブルがあることも少なくない。

私たちは、精神科に通院している子ども達との関わりから、不登校をはじめとした子どものメンタルヘルスの問題の根本には、これまでの被養育体験が影響しているのではないかと考えた。しかし、これらの関連について指摘している文献はあっても、当事者自身の体験について明らかにしている研究は見当たらなかった。私たちは、不登校などの問題があった若者の、自立への過程における困難さと被養育体験について当事者自身の語りから明らかにしていくことが、医療者に求められるケアの向上につながっていくのではないかと考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、児童期・思春期にメンタルヘルスの問題から不登校となった

青年が自覚している被養育体験と自立への課題を明らかにすることである。

Ⅲ．研究方法

1．協力者の概要

X 大学に設置されている子どものメンタルサポートグループに所属し、過去に不登校の経験がある 16 歳以上の男女 3 名。

A...16 歳女性，社会不安障害，中 1～卒業まで不登校，現在高校皆勤

B...16 歳男性，適応障害，小 4～中 2 まで不登校，現在は高校をほぼ皆勤

C...17 歳男性，適応障害，中 3～卒業まで不登校，単位制高校 2 年生休学中

2．研究期間

平成 22 年 8 月～平成 22 年 12 月

3．データ収集方法

半構成的質問用紙を用いて，自立への過程における困難さや被養育体験，家族関係などについて，グループインタビューを行った。インタビューは，当事者にケアを提供している看護師同席のもとで 1 回 90 分実施した。インタビューの内容は対象者に許可をとってから IC レコーダーで録音し，その内容を逐語録に起こしたものをデータとした。

4．分析方法

質的帰納的に分析した。なお，分析する際には看護の質的研究者によるスーパーバイズを受けて，合意に達するまで検討を重ねた。

5．倫理的配慮

対象と保護者に文章および口頭で研究の目的，意義，方法，期待される利益および研究に伴う不利益，いつでも研究参加を拒否・辞退でき，それによる不利益がないこと，個人情報を守られることについて十分に説明し，本人と保護者の双方から書面で同意を得た。なお，本研究は長崎大学医学部保健学科倫理委員会の承認を受けて実施した。

Ⅳ．研究結果

中学時代に不登校の経験がある 3 名から得られたデータを質的帰納的に分析した結果【孤独だった子ども時代】【重要他者の広がり和生活リズムの改善】【不

登校の理由を過去にさかのぼって考えている】【将来への希望と不安】という4カテゴリとそれぞれに含まれる12のサブカテゴリが抽出された。

子ども達は【孤独だった子ども時代】について、争いの多い家族の問題や人見知りな自分、父との接点の少なさといった辛い・孤独なエピソードについて多く語り、楽しかった思い出についてはわずかしか語らなかった。また、3人は共通して【不登校の理由を過去にさかのぼって考えて】おり、自分のメンタルヘルスの問題と幼少期の体験との関連について語った。3名中2名は不登校になったことで、母が今まで気がつかなかった子どものメンタルヘルスの問題に気づき、親子の絆を再構築するプロセスを経験しており、その結果、友人関係や生活リズムにも改善が見られた。一方で残る1名は母との絆の再構築が難しく、生活リズムの改善も困難であったが周囲の大人のサポートを受け徐々に改善していくなど、変化する親と変化しない親の間で【重要他者の広がり和生活リズムの改善】に違いがみられた。3名とも共通して【将来への希望と不安】を抱いていたが、親との絆を再構築する体験を持った2名と体験できなかった1名との間で、将来に対する具体的イメージや自分の現状に合った課題について考えることができる・できないという差が見られた。

以下に、抽出されたカテゴリについて説明する。なお本文中ではカテゴリを【 】, サブカテゴリを《 》, 対象者の語りの一例を「 」で表記する。

1. 【孤独だった子ども時代】

このカテゴリは、《子ども時代の寂しさ》《トラブルの耐えない家庭環境》《ほったらかしにされた乳児期》《特別な思い出としての親との絆体験》の4つのサブカテゴリが含まれ、不登校になる以前にそれぞれが感じていた孤独感の要因や家族との関わりについての語りが含まれた。

子ども達は幼少期のことを「ほとんどおぼえてない」と述べていたが、C君は小学校時代に友達がいなかったことを語り、Aさんは「あまり覚えてないけど友達より弟と遊ぶことが多かった」「お父さんは忙しくてほとんど一緒に遊んだ記憶がないな」と語り、B君は、「外食食べ飽きたし、お母さんのご飯も食べたかった」「俺、保育所でもぼつんと夕方まで一人でおったからね」と、3人も共通して《子ども時代の寂しさ》について語った。また、B君は「5～6歳の

ころ、両親の喧嘩を止めようとして、反対にお母さんからおもちゃ箱投げつけられた」と虐待的な環境で育った悲惨なエピソードを多く語り、C君は「毎日、父親と母親の言い争いがある」「小学校の頃は叩かれたかな。お父さんは吠えることが良くあるし」と語るなど、この2名の語りでは家族からの暴力や争いごとなど《トラブルの耐えない家庭環境》についての語りが共通していた。《ほったらかしにされた乳児期》に関する語りはB君固有のカテゴリであり、「お母さんが起きるのは9時くらいだから毎日幼稚園に遅刻してた。」「覚えてないけど、お母さんが遊びに行くときはいつもばあちゃん家の玄関に置き去りだったらしいよ」「生活をちょっと変えてくれたら、もうちょっと良い高校に行けたと思う」などの語りがあった。《特別な思い出としての親との絆体験》について、B君は「突然の病気のとくに初めて親の優しさを感じた」と語り、C君は「小学校低学年の頃はソフトボールを通して親に送り迎えをしてもらっていて、親と少しは会話したり接点があった。ソフトボールを辞めてからは減った」と語るなど、2名は、親が自分に関心を向けてくれたと実感できたことを忘れがたい思い出として語った。

2. 【不登校の理由を過去にさかのぼって考えている】

このカテゴリは、《幼少期の自分の問題を知っている》《幼少期の親からの影響を考えられる》の2つのサブカテゴリが含まれた。幼少期の自分自身を振り返る中で、幼少期の自分の問題や家庭環境の問題と今の自分の問題とを繋げて考えていた。また、親からの影響を受けている自己像への語りが含まれていた。

《幼少期の自分の問題を知っている》は3名に共通しているものであった。Aさんは「小さい頃からあまりしゃべらない子だったし、真面目すぎたかな」「中学で不登校にならなくても、いつかは病気になっていたと思う」と語った。B君は、「保育所の時代は脱走者やったね。俺、保育所でもぼつんと夕方まで一人でおったからね」「お母さんが起きるのは9時くらいだから、毎日幼稚園も遅刻してた」と保育所の生活リズムに適應できず孤立した寂しい自己イメージについて語った。C君は「小学校4年生位から皆と話しづらくなった。自分の意見を押し通す人が苦手かな。そういうのが積みあがってきた」とコミュニケーションが苦手なことを語っていた。《幼少期の親からの影響を考えられる》も

3名に共通しているものであり、Aさんは「お母さんの完璧主義とそっくりかも」、B君は「生活をちょっと変えてくれたらね、俺ももうちょっと良い高校行けたかな」、C君は「心配性で、何でも全部自分のせいにするところが母ちゃんに似てる」とそれぞれが幼少期の親からの影響を自覚していることを語った。

3. 【重要他者の広がり和生活リズムの改善】

このカテゴリは《不登校に向き合うことによって変化する親への信頼と変わらぬ親への諦め》《友達に対する意味づけの違い》《昼夜逆転にならない子とそうでない子》の3つのサブカテゴリが含まれた。親子がともに不登校に向き合う体験ができると親と子の成長が促され、子どもの重要他者は家族から友人へと広がっていた。また、親子関係の改善は生活リズムの改善にも繋がっていた。

Aさんは「不登校中は家族から学校に行きなさいと言われてたけど、精神科受診後は言われなくなった」、C君は「(不登校当初)学校へ行きなさいって怒られてた」が、通院するようになってからは「なんか、見守られてるって感じかな」と語るなど、2名の親は徐々に不登校を受け入れたことが示されていた。一方C君からは親の変化について語られず、3名には《不登校に向き合うことによって変化する親への信頼と変わらぬ親への諦め》という違いがみられた。また友人関係について、Aさんは「小さいころから特定の仲の良い子とは話せたが、それ以外の子とは話せなかった」「中学生のころは、クラスに親しい友人がいなかった。部活では特定の仲良い子がいたが、楽しくなかった」、C君は「小学生のころは友達に持て余されていた」「同級生に会えば、何言われるんだろう、俺」「高校では友達作りに必死だった。自分より他人が大事って感じで」と語るなど、友人関係での困難さについて語った。一方B君は「不登校中もそれなりに友達はいた」「ずっと休んでても1回会えばもう平気。会ったら普通に遊べる」と友人関係についての悩みを語るC君に対して、対抗するように語るなど《友達に対する意味づけの違い》がみられた。家庭内の問題を多く語ったB君は「お母さんは昔から寝るのが遅くて、俺は寝たいのに眠れなかった」「学校行きたくないし、一日中部屋で一人でパソコンばかりしてるうち、昼と夜が逆転した気がする」と昼夜逆転生活の要因を自分なりに自覚していた。一方、C君とAさんは親が登校を強制しなくなり、生活についてのサポートが得られる

ようになってからは一時的に乱れた生活リズムはまもなく改善するなど《昼夜逆転になる子とそうでない子》という違いがみられた。

4. 【将来への希望と不安】

このカテゴリは《大人になっていくことが怖い》《大人になった自分のイメージ》《近い目標は明確に考えられる》の3つのサブカテゴリが含まれ、将来についての不安な思いを持ちながらも大人になった自分のイメージを持っていることやそれに関連した自己の課題に関する語りが含まれた。

AさんとC君は大人のイメージについて「しっかりしている」「責任が取れる」と共通した語りがあり、C君は「もう17歳だよ。20歳まであと3年しかない」と、大人になっていく自分に対する不安な思いについても語った。またB君は大人のイメージについて語らず、茶化すような言動も見られ将来の話を回避するような語りがあり《大人になっていくことが怖い》という共通性が見られた。《大人になった自分のイメージ》について、AさんとC君は将来の夢を持っており、Aさんは「管理栄養士とか大学行って取ろうかな」「でも、これからそのうち、またやりたいのが見つかるかなー」、C君は「不登校のメンタルケアの仕事をしたい」と語っている。一方B君は働く具体的なイメージを持たず「何もないもん、俺。何すれば良いか分からない」と語り、将来の夢を語る二人に対して「まぶしいね」と述べたり、茶化すような言動が見られた。3名に共通していたことは《近い目標は明確に考えられる》だった。3名にとって「高校はとりあえず卒業したい」が明確な近い将来の目標であった。将来の夢を持たないB君も「休まずに学校に行くこと」と、目の前の課題を越えようとする意欲を持っていた。

V. 考察

1. 子ども時代のエピソードと思春期の問題との関連

子ども時代に虐待などのつらい体験を持続的に受け続けると、抑うつや衝動的な攻撃性、落ち着きのなさなどに至る傾向があるなど、幼少期の体験とメンタルヘルスの問題との関連が指摘されている¹⁾。対象は、子ども時代の楽しい記憶がほとんどないことが共通しており、わずかにある思い出は「子ども時代

の寂しさ」「トラブルの絶えない家族環境」であった。B君は他の2名よりも鮮明な記憶を持っていたが、やはり家族のトラブルや寂しいエピソードばかりであり「ほったらかしにされた乳児期」を周囲の親族から良く聞かされて自分の思い出のように語っていた。そのため親の愛情を確認できた瞬間を非常に貴重な思い出として捉え「特別な思い出としての親との絆体験」となっていた。また、対象は小さいとき自分には他の子どもと違うところがあり、振り返るといろいろな問題があったと語っていた。それは「音に敏感で怖がり」「病気があって休みがち」「話さない子ども」「生活リズムが不規則」などであり、彼らは私たちが予測した以上に自分たちの幼少期の傾向や親からの影響と、思春期における自分の問題とを関連づけて考えていた。そして、過去と現在の問題を真剣に考えて何とか人と上手くコミュニケーションがとれるようになり学校に行きたいという痛々しいほどの熱望が感じられた。親との関係性においては「変化する親と変わらない親」という違いが見られ、両者においては友達に対する意味づけや生活リズムの改善などに違いがみられた。Bowlbyは、安定したアタッチメントを形成できなかった母子は、子どもが援助や励ましを求めても母親が拒絶し落胆させるような行動をとると語っている。親に期待できない体験をした子どもはその後、母親との関係をベースに人間関係を構築していくので友人関係においても困難を感じる³⁾。Ericssonは、基本的信頼の弱さが性格の根底にあると、抑うつ状態に陥りやすく、信頼の状態を再確立することが治療の必要条件である、と述べている⁴⁾。また、Winnicottは「抱えること(Holding)」の重要性を述べている。これは「共に生きる」という概念であり、子どもは適切な抱えがないと情緒発達は達成されない、あるいは達成されたとしても確立するまでには至らないと述べている⁵⁾。対象は、孤独な子ども時代を過ごしており、家族、特に母親との関係の構築が不十分であったことが予測される。そのため、上で述べられているような愛着形成や基本的信頼関係の構築、適切な抱え等が不十分な状態であった。そのような幼少期の家族環境や養育環境が、思春期になり複雑な人間関係や新たな発達課題に取り組む上での困難さを生み、メンタルヘルスの問題として現れた可能性が示唆された。

2. 自立のプロセスでの困難さ

青年期の課題として「自分が自分として存在している実感」や「自分は同年齢の人々と共通しているという一体感」といった、自我同一性の獲得があげられる⁴⁾。自立への過程において、自分の意思で考え選択していくためには、自我同一性の獲得が不可欠である。対象となった3名は、自分探しの入り口にいる年齢であるが、不登校をきっかけに幼少期から潜在化していたメンタルヘルスの問題と向き合うことになった。彼らは自尊感情の低下や自分らしさが分からず混乱する様子で、自分らしさを確認するために重要となる友人関係も非常に限定されていた。自我同一性の獲得に向けては以前に獲得できていなかった課題から段階的に解決していく作業が必要であると考えられる。よって、母親との関係の再構築、親や家族への援助が回復に大きく影響することが本研究の結果によって示唆された。また、対象者は不登校によって学校という社会体験の不足、学習能力の低さ、対人関係から学ぶ成長の少なさなど、自立していくために必要な体験が不足するという2次的に引き起こされる困難さも抱えている。子ども若者問題において、緊急的に援助を必要とする若者への支援、子ども虐待への介入が優先事項となることは、限りある人的物理的資源の中では当然である。しかし、対象のように思春期に生じたメンタルヘルスの問題によって不登校だけでなく対人関係や社会体験が阻害されている若者に対するケアでは、自立支援を視野に入れた包括的で継続的なケアが必要であることが、本研究によって示唆された。

引用文献

- 1) Martin.H.T,友田明美:いやされない傷-児童虐待と傷ついていく脳-,診断と治療社,10-41,2006.
- 2) 目良和彦,武井明,太田充子,他:私立旭川病院精神神経科における思春期患者の実態,精神医学,46,307-315,2004.
- 3) J. Bowlby: A Secure Base Clinical applications of attachment theory, 1988, 二木武監訳,母と子のアタッチメント-心の安全基地-,医歯薬出版株式会社, p160, 1993.
- 4) E.H. Ericson: CHILDHOOD AND SOCIETY (第2版), 1950, 仁科弥生訳, 幼児期と社会, みすず書房, p317-322, 1995

5) D.W. Winnicott : The Maturation Processes and the Facilitating Environment, 1965, 牛島定信訳, 情緒発達 of 精神分析理論, 岩崎学術出版社, p40-44, 1991